

2024_0809「地球から肉眼で見える最も遠い物体（天体写真）」日々の理科 3655号

お茶の水女子大学 サイエンス&エデュケーション研究所 田中 千尋

天体写真を撮影する場合は、大抵は「対象の天体」を決めてからフレーミング（画角）を考えます。たとえば「浅間山から昇る北斗七星」とか「南シナ海の南十字星」といった具合です。だいたい考えた構図は、写真の題名をイメージするとわかりやすいです。しかし、広角レンズで星野写真（せいやしゃしん）を撮っていると、自分が考えていた対象ではない天体が写っていることがあります。いわば「思いがけずに写っていた天体」と言えます。

何年か前に浅間山と星座と一緒に写した写真をよく見たら、比較的明るいのに、星図にはない星が写っていました。それは「恒星ではない星」ということを意味します。周囲の恒星の位置から、赤緯・赤経を特定して調べると、それは「天王星」であるとわかりました。天王星を撮影しようと思ったわけではないのですが、偶然に写っていたわけです。

この日もそういうことがありました。自分の車と森影と東の空の星を同一フレームで撮影したのですが、そこに「アンドロメダ銀河」が写っていました。車の右上、電線の少し上の「光芒」がアンドロメダ銀河です。現地では気づかなかったことを、とても残念に思いました。アンドロメダ銀河は、太陽系から約250万光年も離れているにもかかわらず、肉眼で見えるのです。「地球から肉眼で見える最も遠い物体」ということです。次回この観測地に行ったら、まずこの系外銀河を肉眼で見ようと思っています。

(2024年7月下旬／長野県小諸市)

